0



Japan Design Space Association

一般社団法人 日本空間デザイン協会

### DSA 関東支部 「情報ポスト」

2012年 12月号 VOL.002-1(通算014号)

## 会員からのメッセージ

## 特集 ホスピタリティを大切にした空間デザイン

洪 恒夫 広報担当理事

今号の特集テーマは「ホスピタリティ空間」です。表題のような言葉の定義が 存在するのかどうかはわかりませんが、昨今、空間デザインの現場で仕事し ているとこのような言葉をよく耳にするようになりました。試みに辞書で 「ホスピタリティ」の意味を調べてみると、英語、カタカナともに次のような 類似の内容が記されています。「心のこもったもてなし。手厚いもてなし。歓 待。また、歓待の精神。」などです。ホスピタリティという概念は特定の空間や 場に限って存在するものではありませんが、ホスピタリティが軸となる性格 の施設が存在するのも確かです。それは、病院やクリニックや検診センター など、人の体、それに加えて心へのケアを行う施設や空間などです。病院でい かに不安な気持ちを和らげるか、気持ちを和ませるか、など、メンタルな部分 に大きく関わる空間の総称として用いられることが多いと思います。

私たちDSAが手がける施設は、これまでは商いや販促に直接的、あるいは 間接的に関わる「商業空間」と、博物館、資料館や企業PR、展示会など、場や 施設を通して何かを伝える「情報空間」に大別されてきました。これは人に何 かの体験を促すコミュニケーションメディアとしてデザインされた空間が 目的に応じて働きかける力を持つことは既に皆さんも感じられているかと 思います。今回とり上げるホスピタリティ空間は、改めて考えてみると前述 のどちらにも当てはまらないもののようです。言ってみれば、人の体、心、気 持ちに直接働きかける空間領域です。とは言え、デザインが利用者に対する 効果を発揮する点では記述の2つの空間と変わりはありません。つまり、デ ザインのカ、クリエイターの発想が大きくその作用に影響するのです。

私自身ホスピタリティ空間のデザインとしては、日本赤十字社の有楽町献血 ルームでその効果を実感しました。全面改装のプロジェクトでしたが、リニ ューアルの前後では、採血後の発作などの副作用が実に半分近くに下がった データも目にしています。このように環境デザインによる作用は、心や感情 にとどまらず、身体的なところまで影響することを実感した例でした。

今回は、今後ますます利用者に好影響を与え得るデザイン領域として増えて くるであろう、また、空間デザインが貢献するであろう、「ホスピタリティ空 間」に焦点をあてて、それらに実際に関わり、携わっているデザイナーや仕事 を紹介いたします。



有楽町献血ルーム 撮影:新良太







お待たせしました DSA 情報ポスト第2号をです。

今回は特集テーマとして「ホスピタリティ」をとりあげ ています。医療施設のデザインに携われている木村

さん、今年の大賞を受賞されましたハナムラさんに

寄稿いただきました。「デザインのジャンルを超えて」

語っていただくコラム、装いも新たに継続してまいり

また、2012年度新会員の方々の紹介もお送りします。

ではじっくりご覧ください。



献血ルーム伏見大手筋





酒井矯正歯科クリニック 撮影:木村写真

### クリニックにおけるデザインの役割 ~患者と医師を近づける、こころを伝える。

木村浩之 株式会社ウェルハート

近年、医療業界も競争が激しくなり、市場原理を無視せずに生き残ってゆく のが困難な時代になりました。高度医療の分野ではその技術力の高さや専門 性によって差別化を図ることが可能ですが、地域密着型の「かかりつけ医」的 役割を担う多くのクリニック・診療所は、より一般的な疾病を扱うため、そ うした差異化を図ることがなかなか難しいのが現状です。そうした市場(あ えて市場と書きますが)の中で、いかに生き残ってゆくか、ということが多く の医院経営者の抱える共通課題かと思います。

さて、ではデザインや設計に携わる私たちが、その中で担うべき役割とは何 なのでしょうか。

ひとつは患者と医者を「近づける。」ということではないかと思います。一般 的な商業施設と異なり、クリニックは気軽に中に入ってどのような医者や看 護師達が診療しているのかチェックすることができません。ですから患者さ んは近所の評判やホームページ、パンフレット、駅看板、インターネットのロ コミサイトなど、いろいろなチャネルの情報をもとに事前に判断・選択する ことになります。こうしたコミュニケーションツールをより効果的な媒体と して機能させるうえで、デザイン・設計という要素が貢献できる余地は大い にあると思います。

もうひとつは医者の思いを患者に「伝える。」ということが挙げられます。や っと来院してくれた患者さんですが、今度はさらなるチェックが始まりま す。スタッフが親切か、説明は丁寧か、待合の居心地はよいか、トイレは清潔 か、・・・・。やはりここでも我々の出番は多いはずです。すでにありふれ た感はありますがキーワードはやはり「ホスピタリティ」です。

たとえば、右の写真のリウマチクリニック。痛みをこらえて来院する患者た ちに対して、ソファの座の硬さ、高さ、奥行きにバリエーションをもたせるこ とによって、いろいろなタイプの患者さんに対応した待合ソファを用意して います。会計時の受付カウンターには杖がかけられるようにさりげなく、 くぼみをつけてあげる。海中遊泳のようなリラックスした雰囲気にしたい、 ということで海中の魚たちの映像とヒーリング BGM で演出。少しでも痛みを 和らげてあげたいという先生の思いが様々にカタチになって院内に溢れる よう設計しました。

かっこだけの表層的で独りよがりなデザインでは決して患者に響きません。 多少、野暮な表現でも医者たちの患者に対する思いや姿勢が素直にカタチに 表れているようなデザインが求められているのではないかと思います。医者 と患者の間にある「目に見えない壁」をとりはらってあげる縁の下の力もち、 私たちはそんな役割であるべきではないかと思います。

株式会社ウェルハート

URL : http://www.wellheart.co.jp/

木村浩之

一級建築士・インテリアデザイナー

略歴:法政大学建築学科卒業。住宅、商業施設等の設計事務所を経て、 ウェルハート設立。様々なタイプの設計経験を生かして、現在は クリニックのブランディングを含めた設計・デザインを行なっている。











様々なコミュニケーションツールに おいて、クリニックのイメージや メッセージがリンクしてゆくように デザインしてゆくことが大事。



患者と医者が出会うまでには様々なフィルターが存在している。





見た目にはわかないがソファの高さ が場所によって異なる。 会計や問診票の書き込みを座って 行えるローテーブルのカウンターと、 海中遊泳をイメージした映像と BGM



さりげなくつけれらた杖掛けようの





Japan Design Space Association

一般社団法人 日本空間デザイン協会

## DSA 関東支部 「情報ポスト」

2012年 12月号 VOL.002-2(通算014号) 情報ポストでは、会員の皆様からの記事の投稿や 取り上げて欲しい企画などを随時募集しています。皆 様からの御連絡お待ちしています。

DSA 関東支部事務局まで FAX または E-mail でお 願いします。

FAX: 03-3259-1662

E-mail: 日本空間デザイン協会 dsa@dsa.or.jp

# デザインホットニュース

### 「霧はれて光きたる春」 DSA空間デザイン大賞2012および日本経済新聞社賞

ハナムラチカヒロ (企画、ディレクション、デザイン)

冒頭にもある賞を受賞いたしました本作品は、大阪赤十字病院の入院病棟 の吹き抜け空間で行ったインスタレーションです。全ての入院病棟が面す る吹き抜け空間を、夕方の30分間のみ、立ち上る霧と吹き荒れる雪によっ て冬景色へと変えた後、空から無数のシャボン玉が到来し漂う現象を生み 出しました。光と音で演出されたそれらの現象を、入院患者だけでなく、医 師や看護師や職員など立場や役割の違いを越えた院内の全ての人々が共 有し、共に空を見上げる風景が生まれます。

人は日々与えられた役割や置かれている立場に自分をあわせながら社会 の中で生きています。特に病院のような生死に関わる施設は、治療という 目的に向かって医師・看護師だけでなく入院患者にも機能的な役割を演 じることが求められ、心が置き去りにされがちです。しかし孤独でつらい 入院生活で誰かとのより深いコミュニケーションが必要なとき、こうした 役割を意識することは心の交流を難しくする時があります。ここで考えた のは、患者や医療従事者という役割を皆が脱ぎ捨てて、一人の個人として 心を奪われるような圧倒的な風景を生み出すことでした。

病院は心に不安を抱かえやすい場所です。だからこそ美術館や商業施設よ りも芸術やデザインの力が必要であると考えていますが、実際には様々な 厳しい制約があり状況は困難です。こうした取り組みを通じて、将来病院 におけるこうした芸術行為が医療行為の一環だと自然に呼べるような社 会になることを願っています。







#### ハナムラチカヒロ

S

1976 年大阪生まれ。

「まなざしのデザイン」をテーマに建築やオープンスペースなどの空間デザインや現象のデザインを始めインスタレーションや パフォーマンスなど領域横断的な表現を行う。

ランドスケープデザイナー / アーティスト / 役者 / 研究者。

大阪府立大学 21 世紀科学研究機構准教授。一般社団法人ブリコラージュファウンデーション代表理事。

大阪大学工学研究科建築学科非常勤講師。大阪市立大学都市研究プラザ特任研究員。



### ーデザインのジャンルを超えて一 『キッチンデザイナーから見た空間デザイン』

濱田淳 ADOPT キッチンワークス

ADOPT キッチンワークス

代表 濱田淳 (デザイナー・キッチンスペシャリスト・二級建築士)

東京造形大学卒業後 住宅設備メーカー、イタリア高級キッチンブランド にてキッチンデザインに関わる。

2010 年に ADOPT キッチンワークス設立、オーダーメイドによるキッチン

キッチンデザイナー?おそらく多くの方には馴染みのない仕事だと思います。

この仕事は住宅、商業施設、店舗で建築家や工務店とともに設計に関わり、オーダーメイドで一点ずつオリジナルキッチンをデザイン、設計 する仕事です。キッチンは構成要素が多く、特有の素材、部品、設備機器など周辺知識も幅広く必要で、かつ施主の要望も事細かに及ぶため 建築家でもキッチンは守備範囲外という方が多いのです。

キッチンと空間を考える際に、私は人との関わりを2つの面から考えます。 ひとつは人との物理的な関わり、もうひとつは人との心理的な関わりです。

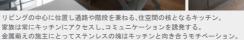
近年キッチンは部屋の片隅から中心に場所を移し、料理を作りだすだけの作業場から、人と人の関わりを深める場として位置付けが変化して きています。

しかし、空間の中心にキッチンが存在するということは、キッチンが人の動きや流れを決めてしまうこともあるし、空間全体の印象を決めて しまうこともあります。特に空間全体に対する影響力が高くなったせいでしょうか。最近の傾向のひとつとして、空間とのバランスに傾倒し、 キッチンと人との関わりという点が軽視されているように感じます。

キッチン固有の空間定義として外せないのは、生活の核である"食べる"行為を生み出す場所であるという点です。それをいかに形作るかと いうことが、キッチンデザインの本質だと自分は考えています。住宅の中でも特に人と人の関係を紡ぐ空間として"食べる"ことに直結する キッチンの役割は大きいと考えます。一緒に食べることで連帯感が深まり、一緒に料理をすることで仲間意識が高まり、知恵や経験を共有 できるからです。キッチンをデザインするということは、食という媒体を通して理想的な関係性や距離感を、装置として設計することなのです。 また同時に、素材使いも重要なファクターだと考えています。単に心地よい素材ということではなく、そこでの過ごし方やモチベーションと 合致すること、そしてその気持ちを誘導する素材を用いることを心がけています。

カタチ、配置、動線、視線、そして素材・・・それらがすべてが伴った時に、家族や仲間との心地よい時間が生まれ、その積み重ねが過ご した時間や空間への愛着に繋がるように思います。







フードクリエーターの集うキッチンスタジオ 創造欲をかきたてるタフなステンレス素材とラフな古材の組み合わせ。 ラフな仕上げのまま使用することで時間や傷の蓄積が歴史となる。







F A

坪坂博文

株式会社博展

## 新規会員紹介(2012年度に入会された方をご紹介します。五十音順)

赤嶺剛央 株式会社乃村丁藝社

大西一夫

髙橋建司

株式会社乃村工藝社

株式会社乃村丁藝社

尼崎有美 有限会社ケナー

改田哲也

土屋 真

首都大学東京

トコタ白動車株式会社

伊東保典 猪瀬恭志 有限会社アイズ・コンプレックス 株式会社丹青社

加藤孝太朗 株式会社ノムラデュオ

九州産業大学 中井利明

C

E

栗田融

株式会社ムラヤマ

宇津木悟 有限会社展示工学研究所

佐藤史能

株式会社ハラヤマ

福田和男

大木康裕 株式会社丹青社

澤田裕二

州村衛香 株式会社スペースイフェクト 株式会社SD

大髙啓二

株式会社エイムクリエイツ

福山ヒデチカ 有限会社福山秀親計画機構